

踏み応へ　山田真砂年

鳴呼といひて草隠れなる蛇苺
道をしへ虚子の通ひし水車小屋
守宮出づ一里塚とはこの辺り
拳ほどの力石あり青葉木菟
目を剥いて銀座を歩く日の盛り
雨粒がぽつんと蟻が蟻はこぶ
神木に風のさ走る遠青嶺
夏草をづかづか踏んで土俵際
夏雲を所定の位置に大浅間
夏草のしたたかなりし踏み応へ
三百年の匂ふ三和土にかなぶんぶん
茄子の花遠嶺にかかる雲まぶし
虎が雨男の子の好きな力石
松蘿さらさら山気降りてくる
蓮の葉の池を三尺膨らませ
片蔭の途切れしところ消火栓
ぢぢと来てコツンカサコソ窓の蟬
合歎ちつてまこと氣息き昼下がり
蟬声のじれつたさうに始まれり
蟬時雨村の真中に火の見櫓
手秤で選びし瓜や三つ買ふ
油蟬尻を重たく木を攀る
谷底に静かな空氣葛の花
稻穂いま成長痛の搖れの中
稻の花埃のやうに散りにけり